

本書は、「連合」発足からナショナル・センターの新しい対抗関係の形成という日本の労働組合運動の歴史的な段階をむかえるにあたって、労働組合のあり方を根本的に考え直す必要があるのではないか、という問題関心のもとで書かれている。

日本経済の緻密な分析や労働者状態の全面的な説明は組合運動の発展に不可欠であるが、それがただちに組合運動の高揚につながるものではない。その間には、労働組合の運動論・組織論の分野がある。そのフィルターを正しく通過することによって、はじめて労働者の潜在的なエネルギーは運動の高揚に結びつくことになる。このことは、かつてわれわれが痛感させられたところでもあった。

高度経済成長の末期、資本主義の「相対的安定期」は長くはなく、その終了とともにかならずや労働組合運動は高揚するだろうという見方が有力だった。しかし、経済的危機によってヨーロッパでは六〇年代末から七〇年代にかけて運動の高揚はみられたが、日本ではそれとはまったく逆に七三年のオイル・ショック以降、労働組合運動は後退するという根本的な相違が浮かび上がった。また、春闘連敗や行政改革で明らかのように労働者の生活や労働の

困難がつづいているにもかかわらず、日本の労働組合運動は「戦後最低の状況」を脱してはいない。

五十嵐と木下にとって大学院時代の先生だった中林賢二郎氏は、労働組合組織論の重要性をつねに強調されていた。中林氏は、日本の労働組合運動が後退局面をむかえた七〇年代後半、「職場の組合員、労働者をいかに思想的に強化するか、という観点のみが重視され」、「労働者の組織化の形態の問題や、既存の労働組合の…企業別組織の問題について、十分に考慮しない傾向があった」（『現代労働組合組織論』労働旬報社）と、みずから「自己批判」という言葉をつかいながらそれまでの労働問題研究の反省をされた。

労働組合の運動論・組織論の発展がもとめられているこの時期に、一九八六年一月、中林先生は亡くなられた。先生の考えをどれだけ受け継ぐことができたか、まったく心もとないが、本書が、研究も立ち遅れ、実践家の関心もあまり高くない運動論・組織論の分野の議論の参考になれば幸いである。

なお、私をふくめた筆者たちは、今日の企業別労働組合をただちに全面否定し、早急な脱皮論を主張しているのではない。日本の企業別労働組合は、全国的な個人加盟組織に移行したからといって克服できるような、なまやさしいものではない。企業別組合を企業社会の全

機構のなかに位置づけ、企業横断的な運動と結びつけて、企業内組織の克服の第一歩を踏み出すべきではないか、ということである。

筆者らのうち、五十嵐、高橋、木下の三名は奇しくも一九六九年、七〇年、大学はそれぞれ違っても共に大学紛争の渦中にあった。そして、今日も、よりよい社会をつくりたいという学生運動時代のおもいは、日常性による風化と、巨大な企業社会を前にしておきる暗澹たる気持ちとたたかいながらも、なお持続させているつもりである。

あのころの「革新時代」を生きた青年や学生はいま「団塊の世代」として社会の中心にいる。この世代が当時の情熱とロマンを、今度は「労働組合をつくりかえる」方向で、いま一度取り戻すことができたならば、そして、そしてもっと若い世代と手を結ぶことができたならば、企業社会も少しはすみやすくなるのではないだろうか。そんな一助にこの本がなれば望外の喜びである。

一九八八年三月

木下 武男

著者紹介

黒川 俊雄 (くろかわとしお)

1923年生まれ

現在：慶応義塾大学教授

主な著書 「労働組合運動と労働者協同組合運動」(『三田学会雑誌』78巻6号)、「戦後階級構成の変化と労働者状態」(『日本の労働組合運動・2』、大月書店、共著)、「現代労働の支配と変革」(『労働組合の民主的変革』(労働旬報社、編著)、その他。

永山 利和 (ながやまとしかず)

1940年生まれ

現在：日本大学教授

主な著書 「現代の労働者像と労働組合組織論」(『労働組合の民主的変革』、労働旬報社、共著)、「兼業パート」(『講座 現代女の一生・6』、岩波書店、共著)、「マイクロエレクトロニクス化と雇用構造」(『社会政策の現代的課題』お茶の水書房、共著)。

木下 武男 (きのしたたけお)

1944年生まれ

現在：法政大学社会学部講師

主な著書 「サービス経済化の進展化がもたらす労働組合運動の新しい課題」(『日本の労働組合運動・2』、大月書店、共著)、「未組織労働者の組織化は戦略的課題」(『日本の労働組合運動・5』、大月書店、共著)、「労働組合とは何か」(『講座・現代 女の一生・6』、岩波書店、共著)。

高橋 祐吉 (たかはしゆうきち)

1947年生まれ

現在：専修大学助教授

主な著書 「『企業社会』のゆくえと労働者」(『これからの日本を読む』、労働旬報社、共著)、「労働組合運動のガン=インフォーマル組織とどうたたかうか」(『日本の労働組合運動・5』、大月書店、共著)、「ME技術革新下の中高年問題」(『転換期の労働者・農民』労働科学研究所、共著)。

五十嵐 仁 (いがらしじん)

1951年生まれ

現在：法政大学助教授

主な著書 「戦後保守政治の転換」(ゆびてる社)、「現代の政治論」(学習の友社、共著)。

目次

I プロローグ あなたにとっての労働組合をどうつくる

——日本労働運動の再生課題

「連合」をのりこえる労働組合運動を／自主性・自発性にもとづく連帯行動／企業内組合の克服の方法／地域づくり・仕事おこし運動へ／全国的視点との結合

黒川俊雄

14

II 「産業空洞化」時代をどう読むか

「プラザ合意」の意味するもの／「国際的経済構造調整」策の登場／自動車「米国土土決戦」の構図／労働者には失業の「洪水」／「緊張」をはらんだ労資関係へ

永山利和

24

これだけは知っておきたい
PART I これからの日本と労働組合

I 「連合」結成——なぜ？	36
1 なぜ、「連合」は結成されたのか	36
——第一次「労働戦線統一」の挫折	
五〇年代争議鎮圧の「成果」／戦後民間の労働運動は終 わった／いったんは挫折したが……	
2 転換した労働組合運動のキーポイント	41
——七五年の展開局面を読む	
ビッグ・ユニオンの登場／「スト権スト」の敗北／とと のった「組合をめぐる環境」	
II 二一世紀戦略をめぐる「混沌」	45
1 臨調・行革路線にもとづく「アクション」	45
政府・財界の国家改造の道／「民活」社会づくり・「税制 改革」／総評労働運動の「解体」へ	
2 政府・財界の二一世紀戦略と労働組合	50
「財界」の変容／「不透明」さがただよوناかでの「物 分かりの良い対応」	
III 「生活小国」における「質上げ」の再浮上	54
「世界」―算術上の詐術／どこまでつづく鉄鋼依存―衰 退／『朝日』でさえ「対等」への疑問	
IV 一生―企業時代の終えん？	62
終身雇用制ってなに？／「企業外への排出」と「外部導 入」の大きな流れ	
V ME化の進展で職場はどうなる	66
変貌過程にある職場の労働／孤立化と二極分解の固定 化／流動―さまざまえる中高年／新しい問題の惹起／「労 働の人間化」はいつ？	
VI 田高下の中小企業はどうなる	72
親企業の海外進出の急増／国内市場の再構築ができるか	
VII 「人生八〇年時代」の課題は何か	77
六〇歳定年制の「空洞化」／高まる社会保障への関心	

VIII 働かすぎをやめて「ゆとり」と文化をわが手に……………85
「仕事が忙しすぎる」／物質的な富だけでよいのか／企業
社会への反省

IX 減りつつける組合組織率——どうする……………92
二七・六％の意味／産業が変わった……………／一四・四％に
なつてよいのか

PART II 知らないと損をする
ウオッチング 労働界と政治 五十嵐 仁

I 政治とのかかわりが深い「連合」……………100

- 1 「連合」と政党……………100
ますますつよまる政治人脈・ネットワーク／「半自民・
非共産」
- 2 アメリカ型かヨーロッパ型か……………105
死活問題になるか？／保守の枠内に止まるか？

II どうなる自民党との関係……………112

- 1 自民党はどう変化してきたか……………112
労働勢力の敵視から組みこみへ／「八五年体制論」の提
起／政労使蜜月状況の全面開花
- 2 「八六年体制」論と「族」政治……………118
「八六年体制論」の登場／ネオ・コーポラティズムの形
成／「族議員」との「共棲関係」

III 社・公・民はどうなる……………124

- 1 社会党の「新宣言」と社公民の結集……………124
野党再編成の「起爆剤」？／総評解散でどうなる？
- 2 公明党の役割……………130
三つの方向／「現実主義化」？

IV 政治参加のバランスシートを読む……………134

- 1 政策・制度要求運動の実際……………134
一八〇回に及ぶ官僚との協議／「平和問題」が一つのカ
ギ
- 2 政治参加のバランスシート……………141

「1%枠」もあっさり要求せず／「行政改革」は「成功」／
「産業空洞化」・時短はどうか／「税制改革」はどうか／
日本の農業をどうする／労働勢力の交渉力強化につながるか

▽政府・自民党と労働組合の関係（年表）……………149

PART III 労働組合をつくりかえる

木下武男

これだけは知っておきたい

I 民間大企業組合の現実は……………156

「影の軍団」のフォーマル化／企業組織と組合組織の一体化

II 「連合」は企業社会の風に乗って……………162

「同意」調達のメカニズム／「企業」に依存して生活する／格差拡大のもとでの競争激化

III 「総決算」日本の労働組合……………167

企業益と国益の最優先でよいのか／総評系幹部はどうす

IV 《いかない、いけない大集合》はできるか……………172

どうする《いかない、いけない》／首都・東京はどちらが多数派になるか／《大集合》はできるか

V 新しいユニオン像を求めて——PART I……………177

大企業少数派労働者は…………／企業をこえた職能重視の組織づくり

VI 地域づくりの担い手として——PART 2……………183

地域の原理と同じ職能の結合／地域労組（ローカル・ユニオン）づくり／地域社会の民主主義的変革の担い手として

VII こんなナショナル・センターがあったら……………188

小なりといえども何ができるのか／自立した生活レベルの向上

VIII 企業社会と決別する普通の人びと……………192

競争秩序からの決別／「新人類」はどうする／「脱企業人」のネットワークづくり

IX 豊かでゆとりある生活向上は……………198

豊かさ・ゆとりの国際比較／労働者生活を向上させる国
づくり／国際連帯をどうする

PART IV 労働者Ⅱ人間の顔をした労働組合づくり 高橋祐吉

これだけは考えておきたい

I 労働組合のアイデンティティとは何か……………210

企業のCI戦略から学ぶ／「カプセル」的人生からの脱
出

II 人間らしい労働への挑戦……………215

余裕とゆとりの喪失状況／「労働の人間化」への大胆な
チャレンジ

III 私たちの生き方が問われている……………219

あきらめるな家庭と子どもへの思い／一人の市民として
生活圏を考えなおす

IV 運動の自己改革の緊急性……………223

受益者民主主義をこえた運動／リアルな現実から出発し
ているか／女性、高齢者、障害者との連帯／新しい運動
から学んでいるか／運動体質の自己改革はすすんでいる
か

V みずからの生きかたを模索できる労働組合……………229

労働者の個別性へのこだわり／労働者の日常性へのこだ
わり／人格の成長をうながす

VI 労働者Ⅱ人間の顔をした労働組合へ……………233

ユニオン・アイデンティティを求めて／「企業国家」改
革へのチャレンジ／労働組合の「ベレストロイカ」

▽私の発言(順不同)——中出森夫(二六)、小林康二(二八)、荒川恒行(三八)、小西勝男(五
八)、岸田孝史(八〇)、上坪陽(八八)、石井辰三(一〇二)、松原新三郎(一〇六)、金子毅
(一一四)、平田啓(一四六)、六本木敏(二五八)、菅頭康男(二六八)、三栖義隆(二八
四)、石沢賢二(二九四)、三瀬勝司(三〇〇)、前川慧一(三〇五)、坂野哲也(三二二)、八
ヶ崎武人(三二六)、都築建(三二四)、荒川昌男(三三〇)、椎葉紀男(三三四)、木村雅英(三
三八)